様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：１７１０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２７９２２３２

研究課題名（和文）養育期の家族における家族機能と祖父母の心理的発達に関する縦断研究

研究課題名（英文）The vertical section study on family function in the family of the nurture period and psychological development of grandparents

研究代表者
仲道　由紀（NAKAMICHI, YUKI）

九州大学・医学（系）研究科（研究院）・助教

研究者番号：００４３７７９０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,700,000円、（間接経費）　810,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、3つの調査より構成された。孫の母親の就業の有無によって祖父母と孫の関わりは異なり、孫の母親が就業している祖父母では、孫育てを担っており、孫は日常生活のなかに存在し、孫を育てる役割のなかで孫との関係性を創造していた。
　また、孫との接触やかかわりが多いほど、祖父母の心理的well-being得点は高く、それらの因子が高得点の場合、精神的健康得点、主観的健康感も高く評価された。孫の誕生・成長を介して、養育期世代と祖父母世代が相互の役割を尊重しながら、遂行していくことがお互いの発達を促し、家族機能をより促進させることにつながることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：This study was comprised of three investigation.The relation of grandparents and the grandchild varied according to the presence or absence of operation of mother of the grandchild.The grandparents that mother of the grandchild began work brought up a grandchild and created the relationship with the grandchild in a role to raise a grandchild.
Grandparents were high in the psychological well-being score so that there were many contact and relations with the grandchild, and a mental health score, a feeling of subjective health were high.While a mother generation and grandparents generation respected mutual roles through birth / the growth of the grandchild, it promoted each other's developments to accomplish a role, and it was suggested that we were connected in promoting a family function more.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学

キーワード：養育期の家族　家族看護　祖父母　子育て支援

１．研究開始当初の背景

今日の少子化の要因の背景の一つに、女性の高学歴化と社会進出があげられる。児童のいる世帯においても、妻就業世帯は半数以上の 61.9%に及ぶ(国民生活基礎調査,2008)。しかし、就労によって女性の家庭役割が軽減されたわけではない。日本の男性の一日の平均家事時間は 23 分、育児 25 分であり(総務省統計局,2006)、国際的にみても極めて短く、妻が有職でもたいして変わらない状況である。

このような社会の変動、家族形態の変容により、家族機能低下が指摘され、家庭や地域の子育て支援システムの構築が必要とされる今日、祖父母が家族として担う役割機能は大きい。三世代同居世帯が著しく減少しているなか、乳児をもつ母親有職世帯においては 34.7%が祖父母と同居しており(第１回 21 世紀出生時縦断調査,2003)、別居においても、孫の親が「夫婦共働き」「ひとり親」の場合、祖父母は孫の家の近距離に居住し、孫との交流頻度が高くなる傾向が認められている。子どもの発達という視座においては、子どもに愛情と適切な養護を与えてくれる信頼できる養育者と場が安定して確保されていることが子どもの健やかな成長発達に必要であり、母親就業は母個人の問題ではなく、家族全体の問題、家族発達の問題であると捉えられる。祖父母の存在は次世代が健やかに生まれ育つための重要なキーパーソンになり得るだろう。しかし、その一方、世代間の育児方針のずれや育児方法の違いに戸惑う祖父母や育児支援を重荷と感じる祖母の姿も報告されている。祖父母が過重負担となり、燃え尽きないようにすることが健康な家族の発達やＱＯＬの向上を支援する家族看護においても重要な課題といえる。

子どもの誕生は、家族に様々な変化をもたらし、親世代は子役割から親役割へ、祖父母世代は親役割から祖父母役割への移行過程であり、お互いの役割を調整し家族関係を拡大するという発達課題と向き合う。子の誕生を経験し、親となった養育期の家族の家族システムや機能についての研究は近年みられ始めたが、サブシステムである祖父母の心理的発達との関連についてはこれまでほとんどあきらかにされていない。また、新しい家族メンバーを迎え、ダイナミックに変化する発達課題に取り組む妊娠期～乳児期の家族を対象にした研究は極めて少ない。

急速な少子高齢化が進む日本において、親となる世代が安心して子どもを産み育てることができ、祖父母となる世代の生活の質を高める支援を確立していくことは急務の課題である。

２．研究の目的

妊娠期から乳児期に至る家族の家族機能の変化と祖父母の心理的発達の関連を明らかにし、母親就業や祖父母の支援の違いによる家族機能の特徴と影響因子を明らかにすること。

３．研究の方法

本研究は、3 段階の研究プロジェクトにより構成された

(1) 幼児期の孫をもつ祖父母へのインタビュー

「祖父母となることの発達」を構成する因子として、先行研究により明らかとなった「社会・文化的関心の拡大」「世代間の親和」「精神的柔和・安定」「未来継承性・自己存在感の確認」「配偶者との親和」「衰えの実感」の 6 因子を基盤に幼児期の孫をもつ祖父 2 名・祖母 2 名（夫婦 2 組）にインタビューを実施し、孫との関わりや孫支援に関する自身の心理的発達について語られた内容を質的帰納的に分析した。

(2)「祖父母となることの発達」尺度の構成

因子を用いた祖父母になる過程の前後の調査

「祖父母となることの発達」尺度の構成因子(下位尺度)「社会・文化的関心の拡大」「世代間の親和」「精神的柔和・安定」「未来継承性・自己存在感の確認」「配偶者との親和」「衰えの実感」を用いて、祖父母になる前後の心理的発達に関する調査を行った。

(3) 第１子妊娠中の妊婦と実夫・実母に対する調査

第 1 子妊娠中の妊婦と実夫・実母に対し、妊娠 8～9 か月時、児が誕生後 1～2 ヶ月時に前方視的に追跡調査を行い、祖父母の支援の違いによる家族機能の特徴と影響要因を検討した。調査時期は、産後の母親の不安が最も高いと指摘されている産後１か月頃を設定した。

４．研究成果

(1) 幼児期の孫をもつ祖父母へのインタビュー結果

孫の母親が就業していない祖父母と孫の関わりは、世話役割より遊びでの関わりが多く、遊びを中心とした関わりのなかで孫との関係性を発達させていく傾向がみられた。一方、孫の母親が就業している祖父母では、孫育てを担っており、孫は日常生活のなかに存在し、孫を育てる役割のなかで孫との関係性を創造していた。また、祖父と祖母は孫育てのなかでの協同作業を通して新たな面の再発見を体験し、お互いの衰えを認め合い協力して孫育てと向き合う姿が浮き彫りとなり、孫育てを通して、関係性の再構築を行っていた。

(2) 祖父母になる過程前後の「祖父母の心理的発達」に関する調査

調査で使用した「祖父母となることの発達」尺度の構成因子(下位尺度)「社会・文化的関心の拡大」「世代間の親和」「精神的柔和・安定」「未来継承性・自己存在感の確認」「配偶者との親和」「衰えの実感」に関して変化がみられ、発達が確認された。しかし、はじめて孫を持ち、祖父母になる過程の前後の変化を全て明らかにできたとは言えない状況であった。壮年期～老年期世代の高齢者にとっては、様々な心身の変化や社会環境の変化が訪れ、それらに適応しながら、さらに豊かな老年期を送ることを希望する。このような社会文化的生活における Well-Being には、個人の加齢パターンや社会的活動と人生に対する満足度の関係などが影響し、従ってそれらを質問項目に追加する必要があることが示唆された。また、成人した子と親(祖父母)との中期親子関係においては、「母親－娘」間の親密な関係だけでなく、「父親－息子」関係が見出され、また、孫の親の就労・家族形態が「一人親家庭」の場合、親子関係満足度は低く、そこには媒介する孫とのかかわり方の影響が示唆された。

(3) 第１子妊娠中の妊婦と実夫・実母に対する調査

84 組（回収率 74%）の妊婦とその実父・実母から回答が得られた。養育期（母親）の家族が共働きの場合、祖父母家族と同居、もしくは近距離の場所に居住する割合が高く、また、産褥育児生活肯定感も高い傾向がみられた。また、孫との接触やかかわりが多いほど、祖父母の心理的 well-being 尺度の「人生における目的」因子、「自己受容」因子に影響を与えており、またそれらの因子が高得点の場合、精神的健康得点、主観的健康感も高く評価されていた。これらは先行研究においても示唆されており、孫の世話役割を担うことは、自己肯定感や自己効力感を増加させ、自己の存在を再認識し、自己受容につながると考えられる。

孫の誕生という人生におけるイベントは

その後の孫という存在の認識、孫との接触、かかわりによって、祖父母世代の心理的well-being に影響を与える重要な因子であることが改めて明らかとなった。孫の誕生・成長を介して、養育期世代と祖父母世代が相互の役割をお互いに尊重しながら、遂行していくことがお互いの発達を促し、家族機能をより促進させることにつながることが提示された。

５．主な発表論文等

〔学会発表〕（計 1 件）

①仲道由紀　他 3 名,「幼児期の孫をもつ祖父母の心理的発達に影響を及ぼす要因」，第 26 回日本助産学会学術集会，2012.5.2,札幌

６．研究組織

(1)研究代表者

仲道由紀（NAKAMICHI　YUKI）

九州大学・大学院医学研究院・助教

研究者番号：00437790